

# 国立故宮博物院所蔵

## 1848年コーカンド文書再考\*

小 沼 孝 博・新 免 康・河 原 弥 生

### はじめに

コーカンド・ハーン国 (ca. 1709-1876) は、フェルガナ盆地のコーカンドを拠点としたウズベク人政権であり、いわゆる中央アジア三ハーン国の一つに数えられる。1759年 (乾隆24)、タリム盆地のオアシス地帯 (カシュガリア、現在の新疆南部) を征服した清朝 (1636-1912) は、ただちにその西に位置するコーカンド・ハーン国と外交関係を樹立した<sup>(1)</sup>。18世紀後半を通じて両者の関係は特に経済面で順調に発展し、比較的良好な関係を維持していた。ところが19世紀前半、コーカンド・ハーン国の国力増強にともない、両国関係は次第に緊張を高めていく。そして、全盛期のムハンマド・アリー・ハーン (Muhammad 'Alī Khān, r. 1822-42) の時代、コーカンド政権はカシュガル・ホージャ家の後裔<sup>(2)</sup>の聖戦に関与し、1826年 (道光6) と1830年 (道光10) に清朝治下のカシュガリアへの侵入を試みた。この背景には、コーカンド・ハーン国の東方貿易独占の意図が現れており、長期的なカシュガリア諸都市の占領を達成し得なかったものの、コーカンド・ハーン国は清朝から ① 関税の免除と、② カシュガリア在住の自国商人からの徴税を請け負うコーカンド・ハーン直属の「アクサカル」 (Aq saqal)<sup>(3)</sup>設置の権利を獲得した。

その後、カシュガリアの政情は比較的平和であったが、1847年 (道光27) に再びホージャ

---

\*本稿は、中国語で発表した小沼・新免・河原 (2011) をもとにし、加筆・修正をおこなったものである。

<sup>(1)</sup> 約1世紀にわたる清-コーカンド関係の概略については、佐口 (1964: 345-530)、潘志平 (1991; 2006)、Newby (2005) を参照。

<sup>(2)</sup> カシュガル・ホージャ家とは、16世紀後半から18世紀中葉に至るまで、カシュガリア一帯で政治的・宗教的権威を誇ったイスラーム神秘主義教団、いわゆるナクシュバンディー教団の指導者一族を指す。1759年に清軍によって駆逐されたが、中央アジア西部へ逃れた後裔たちが1820年代以降に故地カシュガリアへの侵入を繰り返した。中央アジア・中国西部におけるカシュガル・ホージャ家の諸活動については、Fletcher (1995) を参照。

<sup>(3)</sup> 「アクサカル」とは、本来「白い髭」を意味するが、中央アジア社会では「長老、郷約、商頭」に対する呼称として用いられた。清代新疆史研究の立場では、アクサカルの設置要求は、カシュガリアにおけるコーカンド・ハーン国の商権拡大と解釈されている。一方、コーカンド・ハーン国史研究の立場では、清朝政府や現地官員の圧迫からコーカンド人を保護することが目的であったとする見解がある (Kuldashev 2009: 17)。

家後裔の侵入事件が発生する。いわゆる「七人のホージャ」の聖戦である。クルグズ（キルギス）遊牧民の一部とカシュガリアのテュルク系ムスリム（現在のウイグル人）の呼応を得たホージャ軍は、カシュガル回城（旧城）を陥落させることに成功したが、清軍の増援により、事件は短期間で鎮定された<sup>(4)</sup>。

台北の国立故宮博物院には、大量の清代外交関連文書が所蔵されている。その中で、コーカンド・ハーン国に関連するテュルク語文書は3件の現存を確認できる。そのうち2件は、コーカンドの使者アブド・アルガフル（‘Abd al-Ghafūr）が1848年（道光28 / ヒジュラ暦1265）に帶來した「来文<sup>(5)</sup>」であり<sup>(6)</sup>、一つはカシュガルのハーキム・ベグ宛の書簡（「摺件」081391、本稿では文書Aと呼ぶ）、もう一つはカシュガルの清朝大臣宛の書簡（「摺件」081402、文書B）である。この2件の文書は、清-コーカンド関係の晩期、特に「七人のホージャ」侵入以降の外交関係を考察する上で、極めて重要な史料と目される。本文書はすでに唐屹が紹介し、文書のファクシミリ、ローマ字転写（transcription）、英訳、そして文書に関する歴史的問題と言語的特徴について広く考察を加えている（Tang 1984）。その価値は今日でも減じていないが、その後の研究の進展と新史料の活用により、いくつか改善と補足を必要とする部分も出てきた。

唐屹の研究以降における、コーカンド・ハーン国の清朝宛テュルク語文書に関する研究には、中国第一歴史檔案館の所蔵文書を利用した潘・蔣（1988）や濱田（2008）がある。前者は、1832年起草のムハンマド・アリー・ハーンの来文の分析から、同年に生じたユースフ・ホージャ（Yūsuf Khwāja）の聖戦後における両国の交渉を考察したもので、テュルク語文書利用の有効性を示した。後者は、合計9件の文書の訳註であり、その貢献度は極めて大きい。また、テュルク語文書は利用していないが、その満洲語への翻訳文書を利用したディ・コスモの研究（Di Cosmo 1997）も参考すべき価値がある<sup>(7)</sup>。さらに、かつては参照が難しかった清朝の公文書（檔案）や中央アジア側の関連文献についても、現在では利用が可能になってきている。本稿は、以上のような研究の成果・動向をふまえ、1848年のテュルク語文書2件について再検討を試みるものである。

<sup>(4)</sup> 「七人のホージャ」がだれを指すかについて、各史料で異同がある。加藤の考証によれば、その中にムハンマド・アミン（Muhammad Amīn、通称 Kättä Törä）、ワリー・ハーン（Walī Khān）、キチク・ハーン（Kichik Khān）、タワククル・ハーン（Tawakkul Khān）の4人が含まれるのは確実である（加藤 1977: 61-63）。

<sup>(5)</sup> 「来文」とは、外国・周辺勢力が清朝に送付した文書を指す。これに対し、清朝が外国・周辺勢力に送付した文書を「行文」という。

<sup>(6)</sup> 残るもう一件の文書（「摺件」107086）は、ヤークーブ・ベグ（Ya‘qūb Beg）が清の同治帝に宛てた書簡である（Shinmen and Onuma 2012）。

<sup>(7)</sup> ただし、これらの研究はいずれも唐屹の研究を見落としている。

## 1. 文書のテキストと訳註

本章では、文書 A・B のアラビア文字テキスト、ローマ字転写<sup>(8)</sup>、翻訳、および必要最小限の語註を掲げる。テキストとローマ字転写における □ で囲んだ文字は印章の文言、ローマ字転写における [ ] 内の文字は筆者が補ったものである。また、翻訳における [ ] は筆者の補足、( ) は筆者の註釈である。

### 1.1. 文書 A

#### テキスト

- 1 الجى عبد غفورنيك مهوور باسيب توتقان خطى بيزنيك بيكلاريمز تاشكندكا اوروشقالى كتوب وقتنى
- 2 غنيمت تافيب برمونه انسيز خلق اوغورلوقجه خواجهلارنى قوقندين اليب جقيب كاشقر اوزهسيكه كليب  
غلبه قليب
- 3 اولوغ جريك يتب كلكانده سوقوشوب قاجيب قراولنيك تاشيغه جقاندان بيزنيك قوقندنيك بيكي ميز خال نظر  
دادخوانى
- 4 الته يوز كشي بلان الديغه كلشهكا ايباريب خواجهلارنى نعمت ياقوب باشلق نه كشي توتوب قوقندغه
- 5 اليب باريب ياقوب عبدرحيم دولان صالحى قتارلق نه كشي اولتوردى نعمت ملا محمدى قتارلق نه
- 6 كشي بركتب ينه خواجهلارنى مو كشي قيوب باقيب ثورادور قوقنداكي بيكلاريمز منى سن باريب  
اوجورينى
- 7 اولوغ جانكجونكغه معلوم قليب كلكين بيزلار قديمقىدك افلك يمان نيتمز يوق بيزنيك بو غلبه لاردين  
خبريمز يوق تلايمز
- 9 التفات قليب قوقندنيك سوداكرلاريمز قديمقىدك اولاد كليب باريب يورسه ايلكرى
- 10 اولوغ خان اوتكان قوقند سوداكرلاريمزنيك باج ذكواتيني قوقند خلقىغه خوديدا قويوشنى بيز اوزوميز قويساق
- 11 تلاكانيمز قديمقىدك شبو ايكي قسمى ايش ينه بولك قوشادورغان اشيمز يوق ينه خواجه
- 12 لارنى اليب جقيب برالى با اولتورالى ديساك اولار الحال بيغمبرنيك اولادى شريعتدا
- 13 اليب جقيب برماك اولتورماك يوق ايكان بونيك تاش يانيداكي نعمت ملا محمدى قتارلقنى
- 14 بيزلار اندا توتوب ايدوك بيزلار اندا اولتورادورغاننى اولتورب بنلايدورغاننى
- 15 بنلايمز قراولنيك ايجيده بولارنى اولوغ جريك توتقان بولسه بيزلار بر سوز ديكالى
- 16 اصله جاغمز ايماس بيزنيك شرعىكا باقيب اولتوروب بنلاشيمزكا
- 17 اولوغ جانكجونك اشمناسه لار تلايمز التفات قليب كشي قوشتوروب بردورسه لار بله باريب كوروب
- 18 تورسه بيزنيك شريعتدا اولتورادورغاننى اولتوروب بنلايدورغاننى بنلاساك
- 19 ينه كاشقردين قورقوب قاجيب جقيب كتكان اوشاق خلقلارنى بيز اوزوميز كشي
- 20 قوشوب اليب جقيب برساك ينه بيزنيك بيكلاريمز كلكان كشيدين ايتيب ايباركان
- 21 سوزىنيك ديكانى بيزنيك بوندين ايباركان خطميز اندا بارغاندا قاعدهكا كلماسه

<sup>(8)</sup> 転写の方式は、原則として小松ほか(2005: 592)に依拠する。

- 22 اوزونک قاعدهکا کلتوروب خط قلیب مهورونک نی باسیب اشینی اوبدانلق بيله  
 23 توکاتیب کلسانک بولادور دیب اختیاری منکا بریب دور بونددین کین خواجه لارنی  
 24 باشلاب اولارنی قوقندین جیقارمای بیز اوزومیز عده کوتردوک مبادا  
 25 بیزارلار انیکدین خبر المای قوقنددین جقیب ینه غلبه فلسه بیزنیک کلب باریب سودا قلماق  
 26 دین توکول باجمیزنی اوتماکنیک تاشیدا بیزنیکدین سوراسالار بونیک<sup>۶</sup>

- 27 تاش یانیداکی  
 28 کشمیر بدخشان قتارلق یرلار  
 29 نیک خلقی برله بیزنیک اشیمیز یوق تلایمیز  
 30 سولا امبان تاجی حاکم بیکم ینه تاجی حاکم بیکم اشکاغه بیکم  
 31 التفات قلیب اولامجی تیب یوقاری سیغه یتکورسه لار  
 32 دیب مهورومنی باسیب خط توتوم  
 33 ربیع الاول ای نیک یکرمه ایکی سی  
 34 شنبه کونی سنه ۵۶۲۱

به عبد الغفور ابن ملا عبد الصبور عطا کرد حق عز و جاه و سرور

ローマ字転写

- 1 Elchi ‘Abd Ghafūrnī[n]g muhūr basib tutqan khaṭī. Biznī[n]g beqlārimiz Tashkāndgā uru-shqali ketib, waqtni
- 2 ghanīmat tafib, bir muncha ānsiz khalq oghurluqcha khwājalarini Qoqand[d]in alib chiqib, Kashqar ūzāsīgā kelib ghalaba qilib,
- 3 ulugh cherig yetib kelgāndā soqushub, qachib, qarawulnī[n]g tashigha chiq[q]anda biznī[n]g Qoqandnī[n]g begimiz Khāl Nāzar Dādkhwāhni
- 4 alti yūz kishi bilān aldigha, Gūlshāgā ibārib khwājalarini, Ni‘mat, Yāqūb bashliq nechā kishini tutub, Qoqandgha
- 5 alib barib, Yāqūb ‘Abd Raḥīm, Dōlān Šāliḥī qatārlīq nechā kishini ōltürdi. Ni‘mat Mullā Muḥammadī qatārlīq nechā
- 6 kishini berkitib, yānā khwājalarini mu kishi qoyub baqib turadur. Qoqand[d]āki beqlārimiz meni, “sen barib,
- 7 uchurini
- 8 ulugh jangjunggha ma‘lūm qilib kelgin. Bizlār qadīmqudāk aflak, yaman nīyatimiz yoq. Biznī[n]g bu ghalabalardin khabarimiz yoq. Tilāymiz,
- 9 iltifāt qilib, Qoqandnī[n]g sawdāgarlarimiz qadīmqudāk awlād kelib barib yūrsā. Ilgāri
- 10 ulugh khān ōtkān Qoqand sawdāgarlarimiznī[n]g bāj-i dhakawātini, Qoqand khalqigha khudayda qoyushni biz ōzūmiz qoysaq.

- 11 Tilāgānimiz, qadīmqidāk shubu ikki qismi ish, yānā bōlāk qoshadurghan ishimiz yoq. Yānā ‘khwāja
- 12 -larni alib chiqib berä[y]li yā öltürä[y]li’ desäk, ular al-ḥāl payghambarni[n]g awlādi. Sharī‘atda
- 13 alib chiqib bermäk, öltürmäk yoq ekän. Buni[n]g tash yanidaki Ni‘mat Mullā Muḥammadī qatārliqni
- 14 bizlär anda tutub edük. Bizlär anda öltürädürghanni öltürüb, banlaydurghanni
- 15 banlaymiz. Qarawulni[n]g ichidä bularni ulugh cherig tutqan bolsa, bizlär bir söz degäli
- 16 aşla chaghimiz emäs. Bizni[n]g shar‘īgä baqib öltürüb banlashimizgä
- 17 ulugh jangjung ishānmäsälär, tilāymiz, iltifāt qilib, kishi qoshturub berdürsälär. Bilä barib körüb
- 18 tursa, bizni[n]g sharī‘atda öltürädürghanni öltürüb, banlaydurghanni banlasäk.
- 19 Yānā Kashqardin qorqub qachib chiqib ketkän ushaq khalqlarni biz özümüz kishi
- 20 qoshub alib chiqib bersäk.” Yānā bizni[n]g beglārimiz kelgän kishidin aytib ibārgän
- 21 sözini[n]g degäni, “Bizni[n]g bundin ibārgän khaṭimiz anda barghanda, qā‘idagä kelmäsä,
- 22 özüng qā‘idagä keltürüb khaṭ qilib muhūrungni basib ishini obdanliq bilä
- 23 tügätib kelsäng, boladur.” deb ikhtiyārni mengä beribdür. Bundin keyin khwājalaryni
- 24 bashlab ularni Qoqand[d]in chiqarmay, biz özümüz ‘idda kötärdük. Mabādā
- 25 bizlär ani[n]gdin khabar almay, Qoqanddin chiqib yānā ghalaba qilsa, bizni[n]g kelib barib sawdā qilmaq
- 26 -din tügül, bājimizni ötmäkni[n]g tashida, bizni[n]gdin sorasalar. Buni[n]g
- 
- 27 tash yanidaki
- 28 Kashmīr, Badakhshān qatārliq yerlär
- 29 -ni[n]g khalqi birlä bizni[n]g ishimiz yoq. Tilāymiz,
- 30 Sula amban Taji Ḥākim begim, yānā Taji Ḥākim begim, Ishik-agma begim
- 31 iltifāt qilib, ulamjitib yuqarisigha yetkürsälär,
- 32 deb muhūrumni basib khaṭ tut[t]um.
- 33 Rabī‘ al-awwal ayini[n]g yigirmä ikkisi
- 34 shamba küni, sana 1265.

Ba ‘Abd al-Ghafūr ibn Mullā ‘Abd al-Ṣabūr ‘atā kard ḥaqq-i ‘izz wa jāh wa sarūr

### 翻訳

使者アブド・ガフルが印章を押してしたためた書簡。我々のベグが戦うためにタシュケントに行き、〔その〕好機をできるだけ利用して幾人かの落ち着きがない人々が密かに

ホージャたちをコーカンドから連れ出し、カシュガル方面に来て攻撃し、偉大な軍隊（清軍）が到来した時に戦い、逃走して、〔清朝の〕哨所の外に出た時、我々のコーカンドのベグは、ハール・ナザル・ダードハーを600人とともに〔彼らの〕前方、グルチャに派遣し、ホージャたちとニーマト・ヤークーブをはじめとする数名の人を捕え、コーカンドに連れて行き、ヤークーブ・アブド・ラヒーム、ドーラーン・サーリヒーなどの数名の人を処刑しました。ニーマト・ムッラー・ムハンマディーなどの数名の人を投獄し、ホージャたちをも人を置いて監視しています。コーカンドにいる我々のベグは、私に対し、「おまえが行って、〔次のような〕知らせを偉大な将軍に伝えてくるように。我々は以前と同じように睦まじく、悪い意図はございません。我々はこの攻撃について存じませんでした。願わくは、ご厚情を賜り、我々のコーカンド商人たちが以前と同じように子子孫孫往来し続けますように。以前、偉大なるハーンが免除した、我々のコーカンド商人のザカート税〔の徴収〕を、そして〔カシュガリアに住む〕コーカンドの人々に対しフダイダを置くことを、我々自身が扱いたいと思います。我々が願うのは、以前と同様に、上記二つのこと〔だけ〕であり、それ以上に加えることはございません。また、『ホージャたちを連れ出して与えよう、あるいは処刑しよう』と申しましても、彼らは実際のところ預言者の子孫であります。聖法におきましては、〔彼らを〕連れ出して〔身柄を〕引き渡すこと、処刑することはありません。これ（ホージャたち）以外のニーマト・ムッラー・ムハンマディーらの者たちを我々はそこで捕えました。我々はそこで処刑すべき者を処刑し、処置すべき者を処置いたしました。もし〔清朝の〕哨所の内側でこれらの者たちを偉大なる軍隊が捕らえたということならば、我々がなにかを申すつもりは毛頭ございません。我々が聖法に照らして処刑し、処置することを、もし偉大な将軍がお信じにならないならば、願わくは、ご厚情を賜り、人（清朝の使者）を〔私がコーカンドに戻る際に〕随行させていただきますように。〔私と〕ともに〔コーカンドに〕赴き見ていただけるのならば、我々は、聖法にしたがって、処刑すべき者を処刑し、処置すべき者を処置いたします。また、恐れてカシュガルから逃げ出して〔コーカンド・ハーン国領に入った〕下々の者たちを、我々は自分たちで人を付けて連れ出し、〔清側に〕引き渡します。〕〔と申されました〕。さらに、我々のベグが〔私のカシュガル到来後に私のもとに〕来た人を介して申し送った言葉の言うことには、「こちらから我々が送った書簡がそちらに届いた際、もし慣例に沿わないならば、おまえ自身が慣例にしたがって書簡をしたため、おまえの印章を押し、ことを丸く収めてくればよろしい。」と権限を私に与えました。今後、ホージャたちを導いて彼らをコーカンドから出さず、〔それを〕我々自身約束いたしました。もしも我々が知りえずに、〔密かにホージャたちが〕コーカンドから出て、また〔清朝領への〕攻撃をおこなったならば、我々が往来して商売をおこなうことや、我々の税を免除すること以外において、我々にお問い合わせくださいますように。以上のこと以外では、カシミールとバダフシャンなどの土地の人々とは、我々は関係がございません。願わくは、スラ・アンバン（散秩大臣）たるわ

がタジ・ハーキム・ベグ、あるいはわがタジ・ハーキム・ベグとわがイシクアガ・ベグがご厚情を賜り、〔この文書を〕伝達し、お上にお届けいただきますように、と私の印章を押し、〔この〕書簡をしたためました。1265 年ラビー 1 月 22 日、土曜日。

### 語注

**1a, ‘Abd Ghafūr** : 文書 B では、‘Abd al-Ghafūr と記されている。文書 A・B の印章の文言によれば、彼はムッラー・アブド・アルサブール (Mullā ‘Abd al-Ṣabūr) の息子である。1848 年 3 月、アブド・アルガフルはカシュガルで参贊大臣奕山 (Ma. Išan) に馬と方物を献上した<sup>(9)</sup>。文書 A・B の文脈から判断して、アブド・アルガフルは、短期滞在の使者というよりも、カシュガルに中長期滞在する意図をもって派遣されたといえる。ベイセンビエフは、イマーム・アリー・クンドゥズイー (Imām ‘Alī Qundūzī) の *Tawārīkh-i manzūma* の内容にもとづき、アブド・アルガフルはヒジュラ暦 1265 年 (1848-49、道光 28-29) 年にカシュガルのアクサカルの職にあったが、ヒジュラ暦 1266 年 (1849-50、道光 29-30) にコーカンドで絞首刑に処されたと指摘している (Beisembiev 2008 : 305)。またワリハーノフは、当時のコーカンド・ハーン国内の混乱により、アクサカルの交替は頻繁にあり、その状況下でアブド・アルガフルも処刑されたと述べている (Valikhanov 1985 : 148)。ただし、*Tawārīkh-i manzūma* (タシケント本) の記述には、アブド・アルガフルは「暴虐」であるがゆえに、本国に召還され処刑されたとある<sup>(10)</sup>。

**1b, beg** : 当時のコーカンド・ハーンであるムハンマド・フダーヤール (Muḥammad Khudāyār, r. 1845-58, 1862-63, 1866-75) を指す。コーカンドの統治者は、アーリム (‘Ālim, r. 1799-1809) 以降、ハーン (khān) の称号を正式に採用した。しかし、イルダナ (Īrdāna, r. ca. 1758-68/69) の時代より、清朝はコーカンドの統治者がハーンを自称することを認めていなかった。このためコーカンドの歴代統治者は、清朝に対してはベグ (beg) あるいはビィ (bī) の称号を用いた (佐口 1964 : 351-352 ; Newby 2004 : 32-33 ; 潘 2006)。

**1c, Tashkāndgā urushqali ketib** : 1847 年発生 of タシケントの反乱を指すと思われる。コーカンド・ハーン国の重税に対する民衆暴動で、最終的には鎮圧された (Nabiev 1966)。ただし、フダーヤール・ハーン本人が反乱鎮圧に赴いたという明確な証拠はない。

**3, Khāl Nazar Dādkhwāh** : 1847-48 年におけるこの人物の地位については不明である。ベイセンビエフの考証によれば、1862 年にナマンガンの統治者、1862-63 年にアンディジャンの司令官となり、1863 年 1 月に戦死している (Beisembiev 2008 : 173)。

**4, Gülshā** : オシ (現在のクルグズ南部の主要都市) とカシュガルとの間の山間部に位置するグルチャ (Gulcha) を指す。

**5a, Yāqūb ‘Abd Raḥīm** : この人物の来歴は不明である。

<sup>(9)</sup> 「摺件」081398、道光 28 年 2 月初 6 日 (1848/3/10)。

<sup>(10)</sup> Imām ‘Alī Qundūzī, *Tawārīkh-i manzūma*, f. 60.

**5b, Dōlān Ṣāliḥī** : 詳細は不明だが、ヤルカンドーアクス間のバルチュク付近に住むドーラーン (Dōlān) 人に属する人物と見られる。ドーラーン人は独自の生活・文化形態を保持するカシュガリアの「特殊種族」である<sup>(11)</sup>。清代はヤルカンドーアクス間の軍台に配置され、差役に従事させられていた。また、ドーラーン人は白山党ホージャの熱狂的支持者としても知られ、1826年のジャハンギール・ホージャの聖戦には積極的に参加した (佐口 1964 : 449-457)。「七人のホージャ」の聖戦においても、彼らの参加した事実が確認できる (加藤 1977 : 65)。

**5c, Ni‘mat Mullā Muḥammadī** : 清朝史料中の「奈嗎特／奈邁提」を指す。この人物は本来タシケント出身の商人であり、「七人のホージャ」侵入時にはカシュガルのアクサカルを務めていた。ニーマト・ムッラー・ムハンマディーは、「七人のホージャ」軍がカシュガル回城を包囲した際、内応して城門を開け、「七人のホージャ」軍を入城させた。この功績により「ミン・バシ」(Ming Bashi、千人長)の身分を授与された (Valikhanov 1865 : 218-219 ; Valikhanov 1985 : 148-149 ; Kuropatkin 1882 : 145)。ただしその後、清軍到来の報を聞くと、カシュガルでの交易によって獲得していた銀三千数百両とプル銭 (銅銭) 160余串 (160,000文)を棄てて、真っ先に遁走したという<sup>(12)</sup>。なお、1858年にカシュガルに赴いたワリハーノフは、このニーマト・ムッラー・ムハンマディーを Named-khan と呼んでいる。一方、同じくワリハーノフによれば、1857年 (咸豊7)のワリー・ハーン (Walī Khān)の聖戦時にカシュガルのアクサカルは Nurmukhamed-datkha (< Nūr Muḥammad Dādkhwāh) という人物であった (Valikhanov 1985 : 150)。ニュービイは、Named-khan と Nurmukhamed-Datkha を同一人物と考え、ニーマトが再度アクサカルとして赴任したと考えているが (Newby 2005 : 226)、両者は別人と見るべきである (加藤 1977 : 69 ; Kuldashv 2009 : 18)。

**8a, jangjung** : 「將軍」の音写。ただし、この「將軍」がイリ將軍を指すと即断するのは性急である。18世紀中葉以降、カシュガリアに將軍職は設けられず、コーカンドとの交渉はカシュガル駐留の清朝大臣 (Ma. amban) であったが、コーカンド側はこの大臣を「將軍」と呼ぶことを慣例としていたようである。たとえば、1760年 (乾隆25)のイルダナの手簡では、参贊大臣の新柱 (Ma. Sinju) を「シ將軍」(Tu. Shī Jangjung) と記している<sup>(13)</sup>。また、1795年 (乾隆60)のナルブタ (Nārbūta, r. ca. 1768/69-1798/99)の手簡には、「カシュガル地区の事務を管轄する將軍・大臣」(Tu. Kashghar yurtini ishini bilib turghan jangjung ambanlar) との文言が見られる<sup>(14)</sup>。したがって、この文書中の「將軍」とは、カシュ

<sup>(11)</sup> ドーラーン人の歴史と民俗については、佐口 (1995 : 140-170)、Svanberg (1996 : 260-282) を参照。

<sup>(12)</sup> 「奕山奏稿」355-356、道光27年11月初8日 (1847/12/15) 具奏。

<sup>(13)</sup> 「満文録副奏摺」1819.15.1、56 : 2288、乾隆25年4月包。

<sup>(14)</sup> 「満文録副奏摺」3514-9、160 : 3563、乾隆60年10月包。この文書については、近刊予定の Onuma (2013) を参照。

ガルに駐在し、現地事務を統括する清朝大臣と見なすのが妥当であろう。

**8b, 11, 17, 29, Tiläymiz ~ Tiläganimiz** : 一人称の“Tiläymän”（私は願います）を含め、これらを文頭に置く構文は、テュルク語としては不自然であり、むしろ漢文文書の「請」（請うらくは）の用法、あるいはそれに由来する満洲語文書における“Bairengge”の用法に対応する（Onuma 2013）。

**10a, bāj-i dhakawāt** : “dhakawāt” (ذکوات) の正書法は“zakawāt” (زکوات)。ザカート (zakāt) の複数形。ザカートは本来イスラーム教の「五行」の一つであり、ザカート税は窮苦なるムスリム救済のために徴収される税であるが、ここでは清朝が徴収する商税の意で用いられている。新疆征服後、清朝は最初、カシュガリア諸都市から外部へ赴く現地ムスリム商人から商品の見積もり総額の十分の一を徴税し、新疆に到来するコーカンド等の外来商人からは二十分の一を徴税した。しばらくして減税し、新疆現地の商人は二十分の一、外来商人は三十分の一とした（潘 1991 : 58 ; 王 2003 : 273-274）。

**10b, khudayda** : 満洲語の“hūda-i da” (商頭)<sup>(15)</sup>の音写。かつて佐口は、漢文史料中の「呼岱達」(Ch. hudaida) はペルシア語“khudā-dād” (神の与えし) の意と解釈したが（佐口 1964 : 381）、文書 A のアラビア文字の書法（語尾の d が不在）からも、この説はもはや成り立たない<sup>(16)</sup>。

**14, banlaydurghan** : “banla-” (処理する) は漢語の「辦」から作られた清代カシュガリアにおける行政文書用語である。

**28-29, Kashmīr, Badakhshān qatārliq yerlärni[n]g khalqi birlä bizni[n]g ishimiz yoq** : 次章で詳述する。

**30a, Sula amban Taji Hākim begim** : “Sula amban” は、満洲語で「散秩大臣」を意味する“Sula amban”の音写。“Taji” は外藩王公に授与された爵位「台吉」(Ma. taiji < Mo. tayiji) の音写。ハーキム・ベグは清代ベグ制における最高位の官位であり、管轄オアシスの城村事務を統括した。なかでもカシュガルのハーキム・ベグは、コーカンドとの外交事務を担当する特別な職務を持っていた（Onuma 2013）。1848 年当時のカシュガルのハーキム・ベグは、トルファン郡王家の始祖エミン・ホージャ (Amīn Khwāja) の曾孫であったズフル・アッディーン (Zuhūr al-Dīn) である<sup>(17)</sup>。ズフル・アッディーンは「七人のホージャ」軍がカシュガル回城に到着する前に、そのほかの 10 名のベグとともにカシュガル漢城（新城）に逃避していた<sup>(18)</sup>。

**30b, Ishik-gha begim** : イシクアガ・ベグはハーキム・ベグに次ぐ官員で、ハーキム・

<sup>(15)</sup> “hūda-i da” は、“hūda” (商人) と “da” (頭目) の合成語である。

<sup>(16)</sup> ニュービィは満洲語起源説を支持しつつも、満洲語の“hūda-i da” はペルシア語“khudā-dād” に起源を持つとの見解を示すが（Newby 2005 : 65）、これは正確でない。

<sup>(17)</sup> エミン・ホージャの長子ヌール・ムハンマド (Nūr Muḥammad) の孫。カシュガルのハーキム・ベグとしてのズフル・アッディーンの事蹟については、『附編』5-7 を参照。

<sup>(18)</sup> 「奕山奏稿」412 ; Newby 2005 : 223.

ベグの事務を輔佐した。当時のイシクアガ・ベグは二等タイジのアブド・アルマリク (‘Abd al-Malik)<sup>(19)</sup>。

**31, ulamjġitib** : 唐屹は“olar berjertib”と読んだが (Tang 1984 : 18)、これは正確でない。“ulamjit-”は、満洲語の“ulanji-”、あるいはモンゴル語の“ulamjila-” (伝送する) から作られた行政文書用語である<sup>(20)</sup>。

**31, Rabr‘ al-awwal ayini[n]g yigirmä ikkisi shamba küni, sana 1265** : 西暦に換算すると、1848年2月15日になる。

## 1.2. 文書 B

### テキスト

- 1 اولوغ جانكجونكغه من عبد الغفورنيك مهور باسيب توتقان خطم بر قسمیسی بيزنيك قوقندنيك بيكميز همه  
ايش كوشنيك
- 2 اختياريني منكا بريب ایدی منيك سوزوم قوقندنيك بيكي نيك سوزی من عبد الغفور يانیب قوقند بيكلاريميز  
قاشيغه
- 3 بارغاندا من توتقان خطنيك ايجيداكی سوزدين بولك سوز بوتكالسە من عبد الغفوردين سوراسالار من همه  
ايشقه
- 4 ايکه بولامن ينه بر قسمیسی تيلاکانيم
- 5 اولوغ جانكجونك التفات قليب كشي قشوب برسه لار نعمت ملا محمدی قاتارليق لارنی شرعی بلان اولتوروب  
بنلايميز انداغ
- 6 يمانلارنی يورتوميزدا ساقلامايميز موندین بارغان كشي اولتوروب بنلاکانيمیزنی كوروب تورسا مبادا
- 7 بيز نعمت ملا محمدی قاتارليق لارنی اولتورمساک کين کی کونده بو يرلارکا جقيب اشکارا بولوب قالسه  
بيزنيك قوقند
- 8 نيك بيکی دين سوراسالار ينه بر قسمیسی قوقندليقغه اقسقال بولوب کلکان كشي تولاسی اليک كشي
- 9 اليکدين زياده كشي توختاتماساق مبادا اليکدين زياده كشي قاشمیزدا توختاتساق جارلاب تاقيب من  
عبد الغفوردين
- 10 سوراسالار ينه بر قسمیسی قديم کاشقردا اولتوروشلوق خلقيميزدين بولک کاشقرغه سوداغه کلکان
- 11 قوقندلک سوداكرلاريميز سوداسینی توکاتيب در حال قراولدين جقيب کتسه مبادا کين کی کونده اوغورلوقجه
- 12 توختاب قالسه شونی جارلاب تاقيب بنلاب من عبد الغفوردين سوراسالار بو ايشنيک همسيکه
- 13 من عبد الغفور عده کوتاريب مهورومنی باسيب خط توتوم تاريخقه مينک ايکی يوز التمش بش ابط پلی
- 14 ربيع الاول اي نيك يکرمه توقوزی يکشنبه کونی سنه ۵۶۲۱

به عبد الغفور ابن ملا عبد الصبور عطا کرد حق عز و جاه و سرور

<sup>(19)</sup> 「奕山奏稿」418.

<sup>(20)</sup> “ulamjit-”は、1801年(嘉慶6)年にカシュガルのハーキム・ベグが清朝大臣に送付した呈文でも使用されている (Onuma 2010 : 187, 191)。

ローマ字転写

- 1 Ulugh jangjunggha men ‘Abd al-Ghafūrni[n]g muhūr basib tutqan khaṭim. Bir qismisi, bizni[n]g Qoqandni[n]g begimiz hamma ish-kūshni[n]g
- 2 ikhtiyārini mengä berib edi. Meni[n]g sözüüm Qoqandni[n]g begini[n]g sözi. Men ‘Abd al-Ghafūr yanib, Qoqand beglärimiz qashigha
- 3 barghanda men tutqan khaṭni[n]g ichidäki sözdin böläk söz yütkälsä, men ‘Abd al-Ghafūrdin sorasalar. Men hamma ishqa
- 4 egä bolaman. Yänä bir qismisi, tilägänim,
- 5 Ulugh jangjung iltifāt qilib, kishi qoshub bersälär. Ni‘mat Mullā Muḥammadī qatārliqlarni shar‘ī bilän öltürüb banlaymiz. Andagh
- 6 yamanlarni yurtumizda saqlamaymiz. Mundin barghan kishi öltürüb banlagänimizni körüb tursa. Mabādā
- 7 biz Ni‘mat Mullā Muḥammadī qatārliqlarni öltürmäsäk, keyinki kündä bu yerlärgä chiqib äshkärä bolub qalsa, bizni[n]g Qoqand
- 8 -ni[n]g begidin sorasalar. Yänä bir qismisi, Qoqandliqgha aqsaqal bolub kelgän kishi tolasi ellik kishi.
- 9 Ellikdin ziyāda kishi tokhtatmasaq. Mabādā ellikdin ziyāda kishi qashimizda tokhtatsaq, charlab tafib, men ‘Abd al-Ghafūrdin
- 10 sorasalar. Yänä bir qismisi, qadīm Kashqarda olturushluq khalqimizdin böläk Kashqargha sawdāgha kelgän
- 11 Qoqandlik sawdāgarlarimiz sawdāsini tügätib dar ḥāl qarawuldin chiqib ketsä. Mabādā keyinki kündä oghurluqcha
- 12 tokhtab qalsa, shuni charlab tafib banlab, men ‘Abd al-Ghafūrdin sorasalar. Bu ishni[n]g hammasigä
- 13 men ‘Abd al-Ghafūr ‘idda kōtārib muhūrümni basib khaṭ tut[t]um. Tārīkhqa ming ikki yüz altmish besh it̄ yili
- 14 rabī‘ al-awwal ayini[n]g yigirmä toqquzi yakshamba küni, sana 1265.

Ba ‘Abd al-Ghafūr ibn Mullā ‘Abd al-Şabūr ‘aṭā kard ḥaqq-i ‘izz wa jāh wa sarūr

翻訳

偉大なる将軍に、私アブド・アルガフルが印章を押してしたためた書簡。一つのこととして、我々のコーカンドのベグは〔カシュガルで交渉すべき〕すべての事柄の権限を私に与えました。私の言葉は、コーカンドのベグの言葉であります。私アブド・アルガフルが〔コーカンドに〕戻って、我々コーカンドのベグのもとに行きました時に、私がしたためた書簡の中における言葉とは違う言葉に変わりましたならば、アブド・アルガフル

にお問い合わせくださいますように。私は一切のことに責任を持ちます。もう一つのこととして、願わくは、偉大なる将軍がご厚情を賜り、人（清朝の使者）を〔私がコーカンドに戻る際に〕 随行させていただきますように。我々は、〔コーカンドにおいて〕 ニーマト・ムッラー・ムハンマディーを聖法にしたがって処刑し、処置いたします。そのように我々は、これら悪人たちを我々の土地に匿いません。こちらから行く人（清朝の使者）は、我々が〔ニーマト・ムッラー・ムハンマディーを〕 処刑し、処置するのを見ていてくださいますように。もし我々がニーマト・ムッラー・ムハンマディーなどの人々を処刑せず、後日〔彼らが〕 こちらの諸地方（カシュガル地方）に出で、〔その事態が〕 明らかになったならば、我々のコーカンドのベグにお問い合わせくださいますように。もう一つのこととして、〔カシュガリア諸都市に住む〕 コーカンド人に対してアクサカルとしてやってくる者の上限は50人です。我々は50名以上の人を〔カシュガリア諸都市に〕 留まらせません。もし我々が50名以上の人を我々（カシュガリア諸都市に住むコーカンド人）のもとに置いたならば、捜査して見つけ出し、私アブド・アルガフルにお問い合わせくださいますように。もう一つのこととして、以前よりカシュガルに居住していた我々の人々（コーカンド人）以外で、商売のためにカシュガルに来る我々コーカンド人の商人たちは、商売を終えたら直ちに（清朝領の）哨所から出て去るよういたします。もしその後も密かに留まるならば、それを捜査して見つけ、処置して、私アブド・アルガフルにお問い合わせくださいますように。このことすべてを私アブド・アルガフルは保証し、私の印章を押して書簡をしたためました。1265年犬年ラビー1月29日、日曜日。1265年。

### 語注

**1, Ulugh jangjung** : この「将軍」がイリ将軍ではなく、カシュガルの大臣を指すことはすでに述べた。ただし、当時カシュガルに駐留して業務を統括していたのは、ヤルカンド参贊大臣の奕山である。奕山はもともとイリ参贊大臣の職にあったが、「七人のホージャ」の聖戦に対処するため、一時的にヤルカンド参贊大臣に転任していた。

**8, Qoqandliqgha aqsaqal bolub kelgän kishi tolasi ellik kishi** : 次章にて詳述する。

**10, qadīm Kashqarda olturushluq khalqimiz** : すでに加藤（1983 : 23）が指摘しているように、1828年（道光8）のカシュガルのコーカンド人は715戸であり<sup>(21)</sup>、1857年（咸豊7）の報告では、カシュガル回城居住のコーカンド人は4,000～5,000人に達した、といわれている<sup>(22)</sup>。

**13, it yili** : 唐屹は、文書 B 中の十二支紀年法の使用は「清朝皇帝に対する服従の意」を示すと推論している（Tang 1985 : 25）。しかし、清朝が勢力を伸ばす前から中央アジア

<sup>(21)</sup> 『回疆奏議』80 : 83b-84a、道光8年7月19日（1828/8/29）。カシュガルの715戸に、クチャ、アクス、ウシュ、ヤルカンド、ヤンギヒサル、ホタンに居住していたコーカンド人を加えると、合計1567戸である。

<sup>(22)</sup> 『伊犁奏摺』3 : 7a、咸豊7年閏5月3日（1857/6/24）。

社会ではすでに十二支紀年法による年代の記載は広く見られたので、この推論は正確ではない。

14, *rabi' al-awwal ayini[n]g yigirmä toqquzi yakshamba küni* : 西暦に換算すれば、1848年2月22日になる。この日付が正しければ、文書 B は文書 A の7日後に書かれたことになるので、曜日も土曜日 (shamba) であるべきだが、日曜日 (yakshamba) になっている。

## 2. 考察 — 文書の特徴と歴史的背景 —

### 2.1. 文書の特徴

文書 A はカシュガルのハーキム・ベグとイシクアガ・ベグに送られた書信であり、文書 B はカシュガルの清朝大臣に送られた書信である。18 世紀中葉の新疆征服以降、慣例として、コーカンド・ハーン国はカシュガル清朝大臣に宛てた書信と、ハーキム・ベグに宛てた書信の2件を携帯してきた。ただし、清朝大臣宛の書簡は形式的な挨拶文であり、具体的な要求はハーキム・ベグ宛の書簡に書かれる場合が多かった (Onuma 2013)。文書 A (1848 年 2 月 15 日起草) と文書 B (1848 年 2 月 22 日起草) も、この慣例に違うものではない。

ところが、当時カシュガルに駐留して「七人のホージャ」の聖戦後の善後策にあたっていたヤルカンド参贊奕山は、

コーカンドが使者を派遣し、〔道光 27 年〕12 月 12 日にカシュガルに到着した。〔その使者の〕申し立てによれば、彼らのミン・バシであるムスルマン・クリの書状を持ってきている (霍罕遣夷使於十二月十二日至喀什噶爾、據稱帶有該夷明巴什木素滿庫里稟函)<sup>(23)</sup>。

と奏報している。この「12 月 12 日」は 1848 年 1 月 17 日にあたり、文書 A・B の起草日より約 1 ヶ月早い。しかも文書の起草者は、コーカンド・ハーンではなく、ミン・バシ (Ming Bashi) のムスルマン・クリ (Musulmān Quli) であった。この矛盾をどのように理解すべきであろうか。

1842 年にブハラ・アミール国の侵攻によりアーリム・ハーンが殺害されて以降、コーカンド汗の権力は急速に弱体化し、ハーン国の実権は、ブハラ・アミール国からのコーカンド奪還を支援したクルグズの部族首領の手に握られた。キプチャク (Qipchāq) 部族の首領であるムスルマン・クリは、1845 年にフダーヤールをハーンに擁立し、自らは摂政として権力を掌握していた (Nalivkin 143-168 ; Kim 2004 : 78-79)。

ただし、清朝との交渉においては、名目上はコーカンド・ハーンの家臣でしかないムスルマン・クリからの「稟函」は不適切であり、清朝当局に正式に受領してもらえなかった

<sup>(23)</sup> 『宣宗実録』451 : 20a-b、道光 28 年正月庚子 (1848/2/29) 条。

のではないだろうか。少なくとも、この「稟函」の内容について清朝側が審議・対応した形跡は史料上見出せない。さすれば、使者アブド・アルガフルはカシュガル到着後に、ムスルマン・クリの「稟函」に替えて、慣例に倣って2件の書簡を新たに準備したと解釈できよう。無論それら書簡とてコーカンド・ハーンからの書状ではないのであるが、それゆえに**文書 A**の中でアブド・アルガフルは、フダーヤールから「『こちらから我々が送った書簡がそちらに届いた際、もし慣例に沿わないならば、おまえ自身が慣例にしたがって書簡をしたため、おまえの印章を押し、ことを丸く収めてくればよろしい。』と権限を私に与えました。」と弁解し、また**文書 B**の冒頭で「我々のコーカンドのベグは〔カシュガルで交渉すべき〕すべての事柄の権限を私に与えました。私の言葉は、コーカンドのベグの言葉であります。」と強調しているのである。

以上のことは、**文書 A・B**の書式や用語からも明白である。**文書 A・B**では「偉大なるハーン」(ulugh khān)と「偉大なる将軍」(ulugh jangjung)の語が擡頭されている。通常、コーカンドからの来文に擡頭が用いられる例は少ない。また、清朝治下のカシュガリアでは、清朝の行政文書を基礎にして、非常に特徴的なテュルク語の文書書式と用語が作られた(Onuma 2010)。**文書 A・B**に見られる、文頭に“Tilāymiz ~ Tilāganimiz”(願わくは)を置く構文、漢語「辦」からの造語“banla-”(処理する)や満洲語・モンゴル語からの造語“ulamjit-”(伝送する)はその代表例である<sup>(24)</sup>。コーカンドから来て間もないアブド・アルガフルやその同行者が、このような文書形式・用語を熟知していたとは考え難い。よって該文書の実際の起草者は、コーカンド人ではなく、カシュガリア出身者であり、かつ清朝の行政文書の書法に習熟していた者であったと推測される。

## 2.2. フダイダとアクサカル

**文書 A**の中でコーカンド・ハーン国が要求しているのは、カシュガリア域内におけるコーカンド商人の① 関税(ザカート税)の免除と、② フダイダの設置である。コーカンドはこの二つの権利をすでに1832年に獲得しているので、今回はその権利の継続的な行使をあらためて要求したということになる。その理由は後述に譲るとして、ここで問題としたいのは、コーカンドがアクサカルではなくて、フダイダの設置を要求した点である。

佐口やクズネツォフの研究では、フダイダとは、1832年以前の段階にけるカシュガル居留のコーカンド商人の管理者と見なされている。その時代、フダイダは、清朝当局の承認の下、ハーキム・ベグによって選任されたのであり、本国の統治者とは直接の関係はなかった。しかし、1820年(嘉慶25)にコーカンド・ハーン国は初めて清朝にアクサカルの派遣と設置を要求し、ユースフ・ホージャの聖戦後の交渉を通じて清朝に要求を認めさせ、1833年(道光13)にコーカンド・ハーンが直接任命するアクサカルが設置された。

<sup>(24)</sup> そのほかに「賞」から作られた“shangla-”(〔目上の者が〕賞与する)などがある。

このような経緯をふまえて、従来フダイダとアクサカルは性格の異なる別の存在と考えられてきた（佐口 1963：351-352, 380-383, 389-393, 403, 488-490；佐口 1966：220-221, 233；Kuznetsov 1973：137）。

ところが、ニュービイは以上のような解釈に疑問を呈している。その理由は、清朝の漢文史料では 1840-50 年代までフダイダの名称は頻繁に使われており、またその職務はアクサカルとほとんど区別がないのである（Newby 2005：65）。たとえば、「七人のホージャ」に荷担したニーマトについて、ワリハーノフ、クロパトキン、ベリユーらは彼をアクサカルと見なしているが、清朝史料は彼をフダイダと記している<sup>(25)</sup>。

ここで注目すべきは、**文書 B** の中で述べられている、アクサカルの定員 50 名という点である。いかなる史料からも、アクサカルの定員を 50 名とする規定は見いだせないが、ワリハーノフは、ユースフの乱後にコーカンドが清朝に要求した条項について、次のように指摘している。

一、外国から東トルキスタンの六都市<sup>(26)</sup> — アクス、ウシュ、カシュガル、ヤンギヒサル、ヤルカンドおよびホタン — に持ち込まれる商品への税金は、コーカンドによって専用される。二、これらの税の徴収のため、コーカンドは上述の各都市に商業監督者 — 「アクサカル」 — を持つ。それらは、本国の政治代表者でもあるカシュガルの監督者の権威のもとにある。三、六都市に到来したすべての外国人は、あらゆる点において、コーカンドの監督者に従わなくてはならない（Valikhanov 1965：221；Valikhanov 1985：147）。

これら要求がすべて清朝に認められたわけではないが、以上からは、コーカンドのアクサカルがカシュガルだけでなく、カシュガリア西部の六つの都市に設置されていたことがわかる。そしてその中で、カシュガルのアクサカルは、他の都市のアクサカルの代表者として突出した権限を有していた。**文書 B** にある定員 50 名をどのように解釈するかは今後の課題であるが<sup>(27)</sup>、カシュガルの筆頭アクサカルは、他のアクサカルと区別されており、ゆえに 1833 年以後もフダイダの名称が冠せられていた、という推察は可能であろう。

### 2.3. 1840 年代のパミール地域周辺の国際関係

続いて、**文書 A** 第 28-29 行の「以上のこと以外では、カシミールとバダフシャンなどの土地の人々とは、我々は関係がございません。」の一文の背景を考察したい。なぜアブド・

<sup>(25)</sup> 『宣宗実録』432：8a-10b、道光 26 年 7 月甲午（1846/9/1）条；「奕山奏稿」355-356、道光 27 年 11 月初 8 日（1847/12/15）具奏。

<sup>(26)</sup> 六都市（アルティ・シャフル／Alti-shahr）とは、タリム盆地一帯を指す地域名称である。各史料で異同があるが、一般には、カシュガル、ヤルカンド、ホタン、アクス、クチャ、ヤンギヒサル（あるいはウシュ、カラシャール）の六都市を指すといわれている。

<sup>(27)</sup> この定員数について、アクサカルのもとで働く下級官吏を含めた 50 名名なのではないか、という指摘をデイビッド・ブローフィー（David Brophy）氏から受けた。

アルガフルは、わざわざこのような弁明をしているのであろうか。

1831年のユースフ・ホージャの聖戦が終結し、コーカンド・ハーン国が清朝からカシュガリア域内における商業特権の獲得に成功すると、1833年頃から清朝辺境のパミール地域、特にサリコル(Sariqol、現在のタシクルガン付近)一帯に進出を開始した。サリコルはヤルカンドから、カシミール、バダフシャンへ通じる通商路<sup>(28)</sup>の要衝に位置していた。東西貿易の独占を狙うコーカンド・ハーン国は清朝に対し、カシュガリア滞在の自国商人だけでなく、カシミール、バダフシャンなどの外国商人に対する課税権を執拗に要求した。しかし、清朝にことごとく要求を拒否されたため、報復の意味もこめて、サリコルを占領し、外国商人からの徴税を企図したのである(佐口1964: 498-504; Tang 1984: 4-8; 潘1991: 150-152; Newby 2005: 202-206)。

1837年以降、コーカンド・ハーン国のパミール地域への圧力はいったん弱まった。これは、北方のタシケントでの反乱や、ブハラ・アミール国のフェルガナ盆地への侵攻によって内政が混乱したためである。しかし、1845年にムスルマン・クリが権力を確立すると、1846年にムスルマン・クリは、「フダイダ」のニーマトを通じて清朝に、①カシュガリア内のカシミール、バダフシャン、ラダック等の外国商人からの貨税を徴収する、②キプチャク部のブルト(クルグズ)からの地租を徴収する、③ラダック路、バダフシャン路に城塞を築き、哨所を設けて貨税を徴収する、ことを認めるよう要求した。なかでも①と②に関しては、徴税担当のアクサカル(特にカシュガルのフダイダ)の権限を著しく拡大させるものである。当然ながら清朝はこれらの要求を拒否した(佐口1986: 504-506; Newby 2005: 221-223; 潘2006: 112)<sup>(29)</sup>。

以上のようなパミール地域をめぐる軋轢があった中、「七人のホージャ」の聖戦が発生した。1820-30年代において、全盛期のコーカンド・ハーン国には、ユースフの聖戦を支援してカシュガリアでの商権拡大を図った前例があった。しかし、1847-48年のコーカンド・ハーン国は、ムスルマン・クリが権力を掌握したとはいえ、なお内憂外患をかかえており、国力は衰微しつつあった。西北方面でブハラとの戦争やロシアの南下に直面していた状況において、東方のカシュガリアにおける商業特権は国家を支える貴重な財源であり、ハーン国の生命線であったといえる。おそらく、コーカンド・ハーン国が恐れたのは、前例の如く、彼らがパミール問題の報復として「七人のホージャ」を支援した、と清朝から見なされることだったのであろう。もしそう見なされた場合、清朝との関係が悪化し、清朝からの関税免除とアクサカル設置による自国商人への課税権という、すでに獲得していたカシュガリアでの二つの特権が剥奪されることも想定された。すなわち、コーカンド・

<sup>(28)</sup> ブハラの商人も、コーカンド領内を通過する際に通行税を支払わねばならなかったため、パミール地域を経由してカシュガリアと通商をおこなっていた(佐口1966: 227-230)。

<sup>(29)</sup> 『宣宗実録』428: 19a-b、道光26年4月戊申(1846/5/18)条; 『宣宗実録』432: 8a-10b、道光26年7月甲午(1846/9/1)条。

ハーン国は東方関係を安定させるため、今回は清朝への過剰な要求は避け、まずは従来の特権の確実な維持を最優先の目標に定めたのである。「七人のホージャ」の聖戦に加わった人物に対する厳正な処罰の実施をアピールするなど、清朝に対して恭順な姿勢を示している両文書の文面は、この推論の傍証たり得るであろう。

## おわりに

本稿では、台北の国立故宮博物院に所蔵される 1848 年起草のコーカンド文書について、従来の解釈をいくつか修正し、また文書の特徴や歴史的背景について補足的な説明をおこなった。最後に、この文書を受け取った清朝の対応について論じ、結論に代えたい。

奕山はアブド・アルガフルの書簡の漢訳<sup>(30)</sup>を読み、その文面が非常に恭順であること、かつカシュガル人のトフタ・トゥルディ（托胡塔吐爾都 < Tokhta Turdi <sup>(31)</sup> の証言と内容が合致することを確認し、最終的にコーカンド・ハーン国の意向は信用に足りるものであると判断した<sup>(32)</sup>。その後この 2 件の文書は、カシュガルで作成された漢訳文書とともに道光帝に呈遞された。道光帝は、コーカンド・ハーンが「七人のホージャ」のカシュガル侵入の情報を事前に知り得ていなかったことと、書簡の内容が極めて恭順に属することから、旧例に照らして関税の免除とフダイダの任命を認可し、さらに使者のアブド・アルガフルに銀 600 余両<sup>(33)</sup>と蟒袍・調緞の賞与を命じた<sup>(34)</sup>。

ただし、このような決定は、清朝の「寛大さ」だけを示すものではない。この時代、コーカンド・ハーン国だけではなく、清朝も内憂外患を抱えていた。両国には互いに積極的な外交政策を展開する国力を有していなかったのである。1850 年代においてもカシュガル・ホージャ後裔はカシュガル地区への侵攻を繰り返した。1852 年、1855 年、1857 年の 3 回の侵入事件も、「七人のホージャ」の聖戦に参加した経験のあるタワックル・ハーン、ワリー・ハーンらが中心となって起こしたものである（佐口 1963：515-527；Kim 2004：31-32；潘 2006：113-116）。不安定な政治・社会状況が続く中、1864 年には新疆各地で大規模なムスリム反乱が勃発し、さらに 1865 年にはブズルグ・ハーン（Buzrug Khān）に随行したコーカンド・ハーン国の武官ヤークーブ・ベグ（Ya'qūb Beg）が侵入し、新疆における清朝権力は無力化した。時を同じくして、1864 年にロシアはコーカンドへの侵攻を開始し、

<sup>(30)</sup> 文書 A の漢訳は「摺件」081399、文書 B の漢訳は「摺件」081401。唐屹の研究には両漢訳文書のファクシミリが掲載されている（Tang 1984：16）。漢訳の内容は意識であり、省略部分も少なくない。

<sup>(31)</sup> トフタ・トゥルディは、1846 年にコーカンドに派遣され、アブド・アルガフルに随行してカシュガルに戻ってきた人物である。

<sup>(32)</sup> 「摺件」081424、道光 28 年 2 月初 6 日（1848/3/10）。

<sup>(33)</sup> 正確には銀 617 両である（「摺件」081396、道光 28 年 2 月初 6 日（1848/3/10））。

<sup>(34)</sup> 『嘉道諭檔』53：88、道光 28 年 3 月初 6 日（1848/4/9）；『宣宗實錄』453：7a、道光 28 年 3 月庚辰（1848/4/9）条。

1865年にハーン国北部のタシケントを占領、1867年にはタシケントにトルキスタン総督府を成立させた。しかもヤークーブ・ベグの独立（1867年政権樹立）は、かえってハーン国本国の重要な財政基盤であった新疆貿易の利益を停滞させることになった。コーカンド・ハーン国は、1868年にロシアの保護下に入り、ついに1876年には滅亡するに至る。本稿で検討した2件の文書は、清朝とコーカンド・ハーン国の関係の「黄昏」を、まさに暗示しているといえよう。

## 参考文献

### 1. 文書・未刊史料

「摺件」：「軍機処檔摺件」、台北：国立故宮博物院図書文献館所蔵。

「滿文録副奏摺」：「軍機処滿文録副奏摺」、北京：中国第一歴史檔案館所蔵。

「伊犁奏摺」、奈良：天理大学図書館所蔵。

Imām ‘Alī Qundūzī, *Tawārīkh-i manzūma*. Institut Vostokovedeniia Akademii nauk Respubliki Uzbekistan (Institute of Oriental Studies, Academy of Science, Republic of Uzbekistan), No. 597.

### 2. 編纂・公刊史料

『宣宗実録』：『大清宣宗成皇帝実録』476巻、賈楨等奉敕撰、咸豊6年（1856）；[再版]12冊、台北：華文書局、1964。

『回疆奏議』：『那文毅公籌劃回疆善後奏議』8巻（巻73-80）、道光14年（1856）；[再版]2冊、台北：文海出版社、1968。

「奕山奏稿」：馬大正・呉豊培主編『清代新疆稀見奏牘匯編（道光朝巻）』、265-452頁収録、烏魯木齊：新疆人民出版社、1996。

『嘉道上諭檔』：中国第一歴史檔案館編『嘉慶道光兩朝上諭檔』55冊、桂林：広西師範大学出版社、2000。

『附編』：Jaillov Amanbek・河原弥生・澤田稔・新免康・堀直『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』東京：NIHU プログラムイスラーム地域研究東京大学拠点、2008。

### 3. 二次文献

Beisembiev 2008 : T. K. Beisembiev, *Annotated indices to the Kokand chronicles*, Tokyo : Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 2008.

Bellew 1875 : Henry Bellew, “History of Kashgar,” in *Report of a Mission to Yarkund in 1873*, ed. T. Douglas Forsyth, 106-213, Calcutta : Foreign Department Press, 1875.

Di Cosmo 1997 : Nicola Di Cosmo, “A Set of Manchu Documents Concerning a Khokand Mission to Kashgar (1807),” *Central Asiatic Journal*, 41 (2) : 159-99, 1997.

Fletcher 1995 : Joseph Fletcher, “The Naqshbandiyya in Northwest China,” in *Studies on Chinese and Islamic Inner Asia*, ed. B. F. Manz, 1-46, Aldershot, Hampshire ; Brookfield, VT. : Variorum, 1995.

濱田 2008 : 濱田正美「北京第一歴史檔案館所蔵コーカンド関係文書9種」『西南アジア研究』68 : 82-111, 2008.

加藤 1977 : 加藤直人「『七人のホージャたち』の聖戦」『史学雑誌』86(1) : 60-72, 1977.

加藤 1983 : 加藤直人「天理図書館所蔵「伊犁奏摺」について」『史叢』32 : 18-40, 1983.

- Kim 2004 : Kim Hodong, *Holy War in China : The Muslim Rebellion and State in Chinese Central Asia, 1864-1877*, Stanford : Stanford University Press, 2004.
- 小松ほか 2005 : 小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社、2005.
- Kuldashev 2009 : Sh. T. Kuldashev, “Politicheskie, ekonomicheskie i kul’turnye svyazi mezhdru Kokandskim Khanstvom i Vostochnym Turkestanom (XVIII - sep. XIX vv.),” *Avtoreferat, Dissertatsii na soiskanie uchenoi’ ctepeni kandidata istoricheskikh nauk*, Tashkent : Akademiia nauk Respubliki Uzbekistan, Institut Istorii, 2009.
- Kuropatkin 1882 : A. N. Kuropatkin, *Kashgaria : (Eastern or Chinese Turkistan.) : Historical and geographical sketch of the country ; its military strength, industries and trade*, tr. from the Russian by Walter E. Gowan, Calcutta : Thacker, Spink, 1882.
- Kuznetsov 1973 : V. S. Kuznetsov, *Ekonomicheskaiia politika tsinskogo pravitelstva v Sintsiane v pervoi polovine XIX veka*, Moskva : Nauka, 1973.
- Nabiev 1966 : R. N. Nabiev, *Tashkentskoe vosstanie 1847 g. i ego sotsial’no-ekonomicheskie predposylki*, Tashkent : Fan, Uzbekskoi’ SSR, 1966.
- Nalivkin 1886 : V. P. Nalivkin, *Kratkaia istoriia Kokandskago khanstva*, Kazan : Tipografiia Imperatopskago Universiteta, 1886.
- Newby 2005 : Laura Newby, *The Empire and the Khanate : A Political History of Qing Relations with Khoqand C. 1760-1860*, Leiden ; Boston : Brill Academic Pub, 2005.
- Onuma 2010 : Onuma Takahiro, “A Set of Chaghatay and Manchu Documents Drafted by a Kashgar Hakim Beg in 1801 : Basic Study of “Chaghatay-Turkish Administrative Document”,” in *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-20th Centuries* (Toyo Bunko Research Library, 12), eds. James A. Millward, Shinmen Yasushi, and Sugawara Jun, 185-217, Tokyo : The Toyo Bunko, 2010.
- Onuma 2013 : Onuma Takahiro [forthcoming], “The 1795 Khoqand Mission and Its Negotiation with the Qing : Political and Diplomatic Space of Qing Kashgaria,” *Transactions*, 21, Istanbul : Swedish Research Institute, 2013.
- 小沼・新免・河原 2011 : 小沼孝博・新免康・河原弥生「国立故宮博物院所蔵 1848 年兩件浩罕来文再考」『輔仁歴史学報』26 : 107-138, 2011.
- 潘 1991 : 潘志平『中亞浩罕国与清代新疆』北京 : 社会科学出版社、1991.
- 潘 2006 : 潘志平『浩罕国与西域政治』烏魯木齊 : 新疆人民出版社、2006.
- 潘・蔣 1988 : 潘志平・蔣莉莉「1832 年清与浩罕議和考」『内陸アジア言語の研究』4 : 87-102, 1988 ; [再録] 潘 (2006 : 157-171).
- 佐口 1963 : 佐口透『18-19 世紀東トルキスタン社会史研究』東京 : 吉川弘文館、1963.
- 佐口 1966 : 佐口透『ロシアとアジア草原』東京 : 吉川弘文館、1966.
- 佐口 1995 : 佐口透『新疆ムスリム研究』東京 : 吉川弘文館、1995.
- 新免・河原 2007 : 新免康・河原弥生「ブズルグ・ハーン・トラとカッタ・ケナガス村の墓廟」、澤田稔編『中央アジアのイスラーム聖地 : フェルガナ盆地とカシュガル地方』(『シルクロード学研究』28)、79-99、奈良 : シルクロード学研究中心、2007.
- Shinmen and Onuma 2012 : Shinmen Yasushi and Onuma Takahiro, “First Contact between Ya’qūb Beg and the Qing : The Diplomatic Correspondence of 1871,” 『アジア・アフリカ言語文化研究』84 : 5-37, 2012.
- Svanberg 1996 : Ingvar Svanberg, “Ethnic Categorizations and Cultural Diversity in Xinjiang : The Dolans along Yarkand River,” *Central Asiatic Journal*, 40(2), 260-282, 1996.

Tang 1985 : Tang Ch'i 唐屹, "Two diplomatic documents from the Khokend Khanate to Ch'ing empire in the mid-19th century," 『国立政治大学学報』 50 : 1-47, 1985.

Valikhanov 1865 : Chokan Valikhanov, "Alty-shahr : Historical Review," in *The Russians in Central Asia : their occupation of Kirghiz steppe and the line of the Syr-Daria : their political relation with Khiva, Bohkara, and Kokan : also descriptions of Chinese Turkistan and Dzungaria*, by Capt. Valikhanof, M. Veniukof and other Russian travelers, translated from the Russian by John and Robert Michell, 162-238, London : E. Stanford, 1865.

Valikhanov 1985 : Chokan Valikhanov, *Sobranie sochinenii v piati tomakh*, tom. 4, Alma-Ata : Glavnaia redaktsiia Kazakhskoi sovetskoi entsiklopedii, 1985.

王 2003 : 王東平 『清代回疆法律制度研究 (1759-1884 年)』 哈爾濱 : 黑龍江教育出版社、2003.

【付記】 本稿は平成 24 年度文部科学省科学研究費（若手研究 B [小沼孝博]）による研究成果の一部である。

(おぬま たかひろ、東北学院大学文学部)

(しんめん やすし、中央大学文学部)

(かわはら やよい、人間文化研究機構地域研究推進センター)

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26

17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26

27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100

17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26

27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100

文書 A

Tang (1984: 14) から転載。行番号は唐屹が付したものと。



## Reconsidering the 1848 Khoqand Documents Stored at the National Palace Museum

Takahiro Onuma, Yasushi Shinmen, Yayoi Kawahara

### Abstract

A large number of diplomatic documents belonging to the Qing period are stored at the National Palace Museum in Taipei. The collection includes the two documents in 1848, written in Arabic-script Turki, addressed from the Khoqand khanate. The two documents, which were brought by the Khoqand envoy ‘Abd al-Ghafūr, are letters that were presented to the Hākīm beg and the Qing administrator (*amban*) of Kashgar. In 1847, the “holy war” of “Seven Khwajas,” one of the revolts of the “Kashgar Khwaja” descendants, broke out against the Qing. ‘Abd al-Ghafūr was dispatched to Kashgar as the representative of the khanate for the postwar negotiations. Therefore, in our study of the Khoqand-Qing relationship in their final stage, these two documents are highly valuable as original sources. In this paper, mainly on the basis of these documents, we make some revisions in the earlier interpretation and provide some additional explanation, taking into account the features of the documents and their historical background.

Since the conquest of Xinjiang in the mid-eighteenth century, the Khoqand letter addressed to the Qing had been written in the form of a two-letter set. The application of this form can be also observed in the two 1848 documents. However, ‘Abd al-Ghafūr’s arrival in Kashgar was about one month before the draft. In addition, these documents include the *taïtou* (elevating words to the head of the next line to indicate respect), which was a marked characteristic of official documents of Chinese dynasty, and some peculiar words coined from Chinese, Manchu, and Mongol languages, which were used as bureaucratic terms in Eastern Turkistan under the Qing rule. On the basis of these features, we can point out that ‘Abd al-Ghafūr, following the old regulation, prepared the two documents after his arriving at Kashgar and that its actual writer was not a Khoqandian but a local Turki who was well acquainted with the drafting of Qing administrative documents.

In 1831-32, the Khoqand khanate had obtained the following rights from the Qing government: (1) exemption from duty and (2) appointment of a “Commercial Agent” (*Aq saqal*) to the Khoqand Merchants in Eastern Turkistan. In the documents, the Khoqand requested to retain these two rights; however, the title of “Commercial Agent” that the Khoqand had then requested to appoint was not the *Aq saqal* but *Khudayda* (< Ma. *huda-i da*). Most of the earlier studies recognize that the *Aq saqal*, first appointed in 1833, replaced the *Khudayda*; therefore, their positions were different. However, according to the two documents and other related sources, we can understand that the *Aq saqal* of Kashgar held greater authority than those of other cities, who were continuous-

ly called *Khudayda* even after 1833.

After obtaining the commercial privileges in 1831-32, The Khoqand began to spread the power among the Pamir area and tenaciously demanded to the Qing government for a right to collect taxes from the Kashmir and Badakhshan inhabitants. After 1837, the Khoqand's control over those areas weakened because of the political troubles at home and abroad. However, after the establishment of Muslmān Quli's power in 1845, the Khoqand once again requested the Qing for a right to tax the foreign merchants arriving Xinjiang from Kashmir and Badakhshan. The "holy war" of "Seven Khwajas" took place in such a chaotic situation, which involved the conflict of interests of the Pamir area. Although Muslmān Quli came into power, the Khoqand was then at war with the Bukhara khanate and confronted with the pressures of Russia in the northwestern side. The commercial privilege in Qing Xinjiang was an important source of revenue to support the khanate. For the stability of the eastward relations, it was possible that the Khoqand gave priority to certainly protect the vested rights, withholding an aggressive attitude toward the Qing.

The Qing finally approved the "exemption from taxation and appointment of the *Khudayda* according to the old regulations." However, such a decision is not a mere expression of the Qing's magnanimity. At that time, the Qing, as well as the Khoqand, was facing several troubles at home and abroad. Both of the countries had no power to be able to actively promote their own diplomatic policies. The contents of the two documents imply the twilight of the Khoqand-Qing relation.

Key Words : Khoqand, Xinjiang (Eastern Turkistan), Kashgar Khwajas, *Aq saqal*, *Khudayda*